

平成 31 年 5 月 7 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H01849

研究課題名(和文) ユーラシア地域大国(ロシア, 中国, インド)の発展モデルの比較

研究課題名(英文) Comparison of Development Models for Major Regional Powers in Eurasia: Russia, China and India

研究代表者

田畑 伸一郎 (Tabata, Shinichiro)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授

研究者番号：10183071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 36,910,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ユーラシアの大国であるロシア、中国、インドの経済の比較を行った。特に、中央・地方財政関係、マクロ経済、個別産業(鉄鋼産業など)などの比較を行い、3国の違いや共通性を生じさせている要因を明らかにした。違いを生み出す要因としては、ロシアは資源の豊富さ、中国は民营企业や地方政府の活力、インドは民主的選挙が大きな意味を持つことを示した。また、これら3国の国際経済・金融における位置付けや、中国の「一帯一路」政策とロシアのユーラシア経済連合の取組みの関係性などについても分析を行い、それらの問題点などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国、インド、ロシアは、従来、米国、欧州、日本が支配してきた世界経済のなかで、近年、大きな役割を果たすようになってきた。これら3国の経済システムは、日米欧の経済とは異なるモデルを提示しているが、本研究ではどのように異なっているかを明らかにした。これは、日本が今後これら3国と経済などの関係を発展させていくうえで有用な情報を与えるものである。また、これら3国の世界経済に対する影響力が高まっていくと予想されるなかで、それがどのような形で進んでいくのかについても参考となる情報を提供している。

研究成果の概要(英文)：We have compared economies of major powers in Eurasia, i.e., Russia, China and India. Particularly, we made a comparison of central-local fiscal relations, macro economies and industrial sectors such as iron and steel industries and revealed the factors which made differences or commonalities between these three countries. We demonstrated that rich natural resources for Russia, vitality of private business and local governments for China and democratic elections for India played a great role in making differences. In addition, having analyzed positions of these three countries in the international economic and financial system and relationships between the Belt and Road Initiative and the Eurasian Economic Union, we pointed out some problems in these international relations.

研究分野：ロシア経済

キーワード：比較経済体制 ロシア 中国 インド 国際経済

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者が領域代表者を務めた平成 20～24 年度新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」に含まれた計画研究「持続的経済発展の可能性」の成果や方法論を継承し、それを発展させるものとして企画された。同研究では、ロシア、中国、インドの比較により、とくに 1990 年代以降の 3 国の発展モデルの共通性や違いを明らかにし、同時に、これら 3 国が世界システムのなかで重要な役割を果たすようになった原因を明らかにした。同研究の成果は、上垣彰・田畑伸一郎編著『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』(ミネルヴァ書房, 2013 年)にまとめられた。また、領域研究全体の成果は、英文では、Shinichiro Tabata, ed., *Eurasia's Regional Powers Compared - China, India, Russia* (Abingdon, Oxfordshire, UK: Routledge, 2015) にまとめられた。

2. 研究の目的

本研究では、世界金融危機を経て、3 国の発展モデルがどのように変化したのか、なぜそのように変わったのかを明らかにし、その発展モデルの持続可能性の検討を通じて、今後どうなるかを予測することを目的として設定した。さらに、世界システムのなかでの 3 国の役割がどのように変化したのか、今後どのように変わるのかについて考察することを目的とした。より具体的には、第 1 に、3 国における 2000～2007 年の発展モデルと 2011～2014 年の発展モデルの比較を行い、どのように変わったのか、なぜそのように変わったのかを明らかにし、その発展モデルが持続可能なものであるのかについて検討し、今後についても予測を行う。第 2 に、発展モデルの変化に伴い、世界システムのなかでの 3 国の役割はどのように変わったのかを明らかにし、ドル基軸通貨体制の今後の展開や、この 3 国が関わっている BRICS、上海協力機構、ユーラシア経済連合などの経済統合の動きを踏まえたうえで、今後の世界システムのなかでの 3 国の役割について考察する、の 2 つを目的とした。

3. 研究の方法

(1) メンバーがそれぞれの専門とする国を担当するのではなく、分野別に担当を決め、それぞれが 3 国の比較を行う体制を取った。これは、上記の新学術領域研究の方法を踏襲するものである。分野としては、マクロ経済、ミクロ経済(個別産業)、社会問題、地域経済、世界システムを 5 つのサブトピックスと設定し、分担して研究を推し進めた。

(2) 統計データの経済学的分析が中心的作業の 1 つとなるが、歴史的経緯や政治・社会・文化的背景を踏まえた政策・制度面での比較分析をはじめ、学際的な視点からの分析を重視した。政治学、国際関係論、社会学の専門家を交えた研究会や学会パネルなどを組織した。

(3) それぞれが専門とする国以外の状況・実態を知るために、3 国を共同で訪問し、聞き取り調査などを行った。2015 年度にはロシアのモスクワ、2016 年度には中国の深圳と香港、2017 年度にはロシアのサンクトペテルブルク、2018 年度にはインドのムンバイにおいて合同の現地調査を行った。

4. 研究成果

(1) 本研究の最終的な研究成果は、2018 年 6 月に北海道大学で開催された第 58 回比較経済体制学会全国大会における共通論題「ユーラシア地域大国の比較と関係」の基調報告として発表した。この共通論題では、本研究の研究代表者・分担者・協力者の計 7 名が計 4 本の報告を行った。このうち共通論題の「比較編」で発表した 3 本の報告は、本研究で重視してきた中央・地方財政関係、マクロ経済、個別産業(鉄鋼業)に関するロシア、中国、インドの比較であった。もう 1 本は共通論題の「関係編」で報告されたもので、ユーラシア経済連合に関するものであった。この研究報告のうち、比較編の 3 本については、さらに修正を加えたものが、比較経済体制学会の学会誌において特集「ユーラシア地域大国の国際比較」として掲載された。関係編の 1 本も同学会誌の次号に掲載されることが決まっている。

(2) 本研究で重視したロシア、中国、インドの中央・地方財政関係の比較では、3 国の制度の比較を行った後、財政再分配機能や地方財政の自立性などを分析し、3 国の特徴を明らかにした。特に、ロシアでは最も中央集権的な財政構造となっているが、財政再分配機能は最も低いこと、中国では最も地方分権的な財政構造となっており、中央から地方への移転が最も大きな役割を果たしているが、地方財政の自立性が最も高いこと、インドでは地方の自主財源が少なく、地方の自立性が低いことなどを明らかにした。

(3) マクロ経済の比較においては、石油価格の上昇がもたらすマクロ経済への影響を、石油輸出国であるロシアと石油輸入国である中国とインドのユーラシア地域大国 3 国で定量的に比較した。ベクトル自己回帰(VAR)モデルを用いた分析結果によると、石油価格ショックと石油への投機的な需要ショックの 2 つのケースで、中国とロシアで対照的な結果が得られた。すなわち、中国ではこれらのショックは物価を高めるのに対して、ロシアでは生産を拡大させる。また、世界景気のプラスのショックを意味する石油需要ショックは、中国においてもロシアにおいて

も生産を拡大させる。ロシアでは、それはさらに物価も高める。これに対して、インドでは石油ショックについて統計的に有意な結果が得られなかった。

(4) 個別産業の比較では特に中国とロシアの鉄鋼業の比較を行った。両国の鉄鋼業の貿易構造、産業組織、設備の状況を日本などとも比較することによって、なぜ両国の鉄鋼業が比較優位を持っているのかを解明した。その結果、競争力の源泉はロシア鉄鋼業の場合は豊富な資源、中国鉄鋼業の場合は投資コストを抑制する民営鉄鋼メーカーの経営戦略にあることを明らかにした。

(5) 国際関係の分析においては3国の関係について分析した。そのなかで、中国の「一帯一路」政策とロシアのユーラシア経済連合の取組みが有する関係について考察し、これを結合するという構想は実現可能性が低いことを明らかにした。さらに、国際金融市場におけるロシアと中国の立ち位置についての比較も行い、両国がグローバル・インバランスとその後の国際金融においてどのような役割を果たしたかを明らかにした。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計45件)

金野 雄五「ユーラシア経済連合：統合の現段階と一帯一路との関係」『比較経済研究』第56巻第2号(掲載決定), 2019, 査読有

田畑 伸一郎, 梶谷 懐, 福味 敦「ロシア, 中国, インドの中央・地方財政関係の比較」『比較経済研究』第56巻第1号, pp. 1-16, 2019, 査読無(招待論文)

DOI: 10.5760/jjce.56.1_1

佐藤 隆広, 福味 敦「ユーラシア地域大国における石油価格とマクロ経済」『比較経済研究』第56巻第1号, pp. 17-29, 2019, 査読無(招待論文)

DOI: 10.5760/jjce.56.1_17

丸川 知雄, 服部 倫卓「中国・ロシアの鉄鋼業」『比較経済研究』第56巻第1号, pp. 31-47, 2019, 査読無(招待論文)

DOI: 10.5760/jjce.56.1_31

上垣 彰「トランプ現象とロシア経済」『ロシア・東欧研究』第46号, pp. 7-26, 2018, 査読無(招待論文)

DOI: 10.5823/jarees.2017.7

Tomoo Marukawa, Regional unemployment disparities in China, *Economic Systems*, Vol. 41, pp. 203-214, 2017, 査読有

DOI: 10.1016/j.ecosys.2016.11.002

Prabir Bhattacharya, Takahiro Sato, Estimating regional returns to education in India: A fresh look with pseudo-panel data, *Progress in Development Studies*, Vol. 17, No. 4, pp. 282-290, 2017, 査読有

DOI: 10.1177/1464993417716357

Ichiro Iwasaki, Akira Uegaki, Central Bank Independence and Inflation in Transition Economies: A Comparative Meta-Analysis with Developed and Developing Economies, *Eastern European Economics*, Vol. 55, No. 3, pp. 197-235, 2017, 査読有

DOI: 10.1080/00128775.2017.1287548

Shinichiro Tabata, Factors underlying inflation in Russia 2000-2015, *Eurasian Geography and Economics*, Vol. 57, No. 6, pp. 727-744, 2016, 査読有

DOI: 10.1080/15387216.2016.1228076

田畑伸一郎「ロシア経済の変動：新しい成長モデルの模索」『比較経済研究』第53巻第2号, pp. 9-22, 2016, 査読無(招待論文)

DOI: 10.5760/jjce.53.2_9

Kamal Vatta, Takahiro Sato, Garima Taneja, Indian Labour Markets and Returns to Education, *Millennial Asia*, Vol. 7, No. 2, pp. 107-130, 2016, 査読有

DOI: 10.1177/0976399616655001

Atsushi Kato and Takahiro Sato, Greasing the wheels? The effect of corruption in regulated manufacturing sectors of India, *Canadian Journal of Development Studies*, Vol. 36, No. 4, pp. 459-483, 2015, 査読有

DOI: 10.1080/02255189.2015.1026312

Azusa Fujimori and Takahiro Sato, Productivity and Technology Diffusion in India: The Spillover Effects from Foreign Direct Investment, *Journal of Policy Modeling*, Vol. 37, No. 4, pp. 630-651, 2015, 査読有

DOI: 10.1016/j.jpolmod.2015.04.002

[学会発表](計45件)

田畑 伸一郎, 梶谷 懐, 福味 敦, 佐藤 隆広「ユーラシア地域大国の中央・地方財政関係」比較経済体制学会(招待講演), 2018

佐藤 隆広, 福味 敦「ユーラシア地域大国の石油価格とマクロ経済 - 中国・インド・ロシアを事例として - 」比較経済体制学会 (招待講演), 2018
丸川 知雄, 服部 倫卓「中国とロシアの鉄鋼業比較」比較経済体制学会 (招待講演), 2018
金野 雄五「ユーラシア経済連合」比較経済体制学会 (招待講演), 2018

〔図書〕(計9件)

末廣 昭、田島 俊雄、丸川 知雄『中国・新興国ネクサス』東京大学出版会, 352 頁, 2018
梶谷 懐『中国経済講義』中央公論新社, 272 頁, 2018
梶谷 懐, 藤井 大輔『現代中国経済論 [第2版]』ミネルヴァ書房, 336 頁, 2018

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 丸川 知雄

ローマ字氏名: Tomoo Marukawa

所属研究機関名: 東京大学

部局名: 社会科学研究所

職名: 教授

研究者番号 (8桁): 40334263

研究分担者氏名: 佐藤 隆広

ローマ字氏名: Takahiro Sato

所属研究機関名: 神戸大学

部局名: 経済経営研究所

職名: 教授

研究者番号 (8桁): 60320272

研究分担者氏名: 上垣 彰

ローマ字氏名: Akira Uegaki

所属研究機関名: 西南学院大学

部局名: 経済学部

職名: 教授

研究者番号 (8桁): 70176577

研究分担者氏名: 梶谷 懐

ローマ字氏名: Kai Kajitani

所属研究機関名: 神戸大学

部局名: 経済学研究科

職名: 教授

研究者番号 (8桁): 70340916

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 金野 雄五

ローマ字氏名: Yugo Konno

所属研究機関名: みずほ総研

部局名: 調査本部欧米調査部

職名: 上席主任エコノミスト

研究協力者氏名: 福味 敦

ローマ字氏名：Atsushi Fukumi

所属研究機関名：兵庫県立大学

部局名：経済学部

職名：准教授

研究協力者氏名：服部 倫卓

ローマ字氏名：Michitaka Hattori

所属研究機関名：ロシア NIS 貿易会

部局名：ロシア NIS 経済研究所

職名：副所長

研究協力者氏名：田畑 朋子

ローマ字氏名：Tomoko Tabata

所属研究機関名：北海道大学

部局名：スラブ・ユーラシア研究センター

職名：共同研究員

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。